

手話で歌うということ —翻訳としての手話歌に関するメタ語用論的試論—

土田まどか(東京大学大学院)

本発表は、日本およびアメリカにおける“手話歌問題”について、先行研究の事例分析を再検討するかたちで論じるものである。手話歌とは歌に手話をつけたパフォーマンスであるが、聴者の福祉的意図とは裏腹に当のろう者からは反発が少なくない。これを本発表では聴者からろう者への「歌の翻訳」とその「失敗」と捉え、論じる。

翻訳としての手話歌には①言語の翻訳②音楽経験の翻訳③音楽概念の翻訳が含まれ得る。中でも音楽を音のないかたちへと翻訳することが求められる②音楽翻訳はろう者を翻訳先に据えてこそ先鋭化する局面であるが、果たして可能なのだろうか。翻訳論や記号学／記号論等と突き合わせながら検討する。特に後者に関し、本発表ではソシユール記号学的発想ではなく、社会記号論、特にマイケル・シルヴァスティンのアプローチを中心的に採用する。そこで見えてくるのは音楽と詩的機能、そして儀礼(性)との密接な関係である。

実際に事例として検討をするのは、アナベル・メイラーの論文[Maler 2015]で報告された、聴者とろう者との手話歌における音楽表現の違いである。メイラーによれば、聴者は音声歌の高さやリズム等を視覚的に表現する傾向があるのに対し、ろう者は、手話詩の韻律技法を用い、もとの音楽と形式的に直接の近接性をもたない「翻訳」を行う。更に日本では2016年、「ろう者の音楽」をテーマとした無音映画がろう者によって制作されており、「音のない音楽」という概念翻訳が現れつつある。

このように手話歌という事例は既存の音楽概念の相対化を促し、音楽実践の多感覚性そして(メタ)プラグマティックな側面の重要性を再認識させるが、この視座自体は音楽民族学の研究蓄積とかなり共鳴する部分があるはずだ。最後に広く「一般音楽学」[徳丸 2016]の一つとして手話歌の位置付けを探る。

(なお、本発表は2017年12月に東京大学大学院文化人類学研究室に提出された修士論文を元に大幅に変更を加えたものである。)